

# 一生成仏抄

御書全集 384 次 2 行目〜5 行目  
編年体御書 22 次 2 行目〜5 行目

衆生しゅじょうと云いうも仏ほとけと云いうも亦また此かくの如ごとし迷まよう  
時ときは衆生しゅじょうと名なけ悟さとる時ときをば仏ほとけと名なけたり、譬たとえ  
ば閻あんぎよう鏡みやがも磨みがきぬれば玉たまと見みゆるが如ごとし、只ただ今いまも  
一いち念ねん無む明みようの迷めい心しんは磨みがかざる鏡かがみなり是これを磨みがかば  
必かならず法ほつ性しょう真しん如にょの明みよう鏡きようと成なるべし、深ふかく信しん心じんを発おこ  
して日にち夜や朝ちよう暮ぼに又また懈おこたらず磨みがくべし何いか様ようにして  
か磨みがくべき只ただ南なん無む妙めう法ぽう蓮れん華げ経きやうと唱となへたてまつ  
るを是これをみみがくとは云いうなり

## 通解

衆生しゅじょうといつても仏ほとけといつても、また同様どうような  
のである（二つの隔へだてがあるわけではない）。  
迷まよっている時ときには衆生しゅじょうと名なづけ、悟さとった時ときに  
は仏ほとけと名なづけるのである。  
たとえば、曇くもつていて、ものを映うつさない鏡かがみも、  
磨みがけば玉たまのように見みえるようなものである。  
今いまの（私たち凡夫ぼんぶの）無む明みようという根こん本ほんの迷まよ  
いに覆おおわれた命いのちは、磨みがかない鏡かがみのようなもの  
である。これを磨みがくなら、必かならず真しん実じつの悟さとりの  
智ち慧えの明めい鏡きようとなるのである。  
深ふかく信しん心じんを奮ふるい起おこして、日にち夜や、朝あさ夕ゆうに、  
また怠おこたることなく自じ身しんの命いのちを磨みがくべきである。  
では、どのようにして磨みがいたらよいのであ  
ろうか。ただ南無妙法蓮華経なんむめうぽうれんげきやうと唱となえること、  
これが磨みがくということなのである。

## 語句

無明むみまう

生命せいめいの根こん源げん的てきな無む知ち・迷まよい・癡おろかさであり、一切いっさいの煩ぼん惱のうを生う  
む根こん本ほんとされる。

法性真如ほつしょうしんにょ

「法性」とは、万物ばんぶつを貫つらぬく根こん本ほんの法ぽうそのもの、仏ほとけの悟さとりの  
本ほん質しつ。「真如」は、ありのままの真しん理りのこと。